

正行の母と等しく、これに勝るとも劣らぬ親子のきずなである。七歳の子供心にも澄子さんの孝心、母親の心事、夫大沢五三氏を思う心、わが子を殺さず、死なせずに引きあげてくれた、誰か感動せざるものがあるうか。

澄子さんは、自著「大地の風」の売上げ資金で残留孤児教育資金とする基金を設立して日中友好の楔として精進している崇高な運動に敬意と感謝を表する。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

渡満、召集、敗戦、引き揚げまで

の苦難

北海道 神田 雅夫

大望を抱き満州へ

私は若い時から、この狭い日本より支那へ渡って活路を開くことを念願していた。

高専を卒業して私を満州へ行かせて欲しいと養父母に申し出た。

さあ大変！実は私は養子なのである。

私を一人前にして家業を継がせるため学業が終わるのを一日千秋の思いで待っていたのであった。雅夫は気が狂ったと親族会議を開く始末、何も気がおかしくなった訳ではない。私の持論をよく説明し、不承々々納得を得たのである。

それでは資金を持って行けという、私は断固として断った。親の資金を持って行って、成功しても親のお陰、失敗すれば親の財産を潰した息子といわれるのは必定、資金はいらないと、やっと説き伏せ旅費として三百六十円貰って旅立った。

先ずは当時、満州と朝鮮の国境近くの満浦鎮で間組が世界一のダムを建設することと木材を納入すべく現場に乗り込んだが、現地には山はあるが用材になるような木材は一本も無い。

これだけの大工事の用材はどうするのかと調査の結果、安東から鴨綠江を船で逆送すること、これで

は商売にならない。

考えを変えて大連に渡ることにした。

大連で木材問屋関係に渡りをつけて、満州国の首都新京特別市に店を構えることにした。木材商、神田商会の看板を古びた煉瓦建ての家屋に掲げ木材商として発足したのである。得意先も無い、資金も無い、一介の青年が、名刺一枚で各組を廻り始めた。

当時は満州建国ブームに乗って至るところで工事ラッシュ、組は大林、清水、銭高、大倉、戸田、間、高岡と日本を代表する一流の組が、進出している、先ずは金の取りはぐれの心配はない、足繁く組訪問の毎日が始まった。一回でも注文を受け納入して信用を得ればしめたもの、一流の組から次々と注文が来るようになり、個人の木材商としては新京市屈指の木材商に成長した。

資金の余裕につれ土建業、東亜スレート、貸家建設と手を伸ばし、今日の財産に換算すると百五十億円くらいにもなる。

又終戦と同時にソ連国境方面から新京へ新京へと辿

り着いた避難民の生活費は日本から送金するすべもなく、勿論中国側が負担してくれるわけでもなく、更に日本へ帰還させる費用も結局は新京在住者の我々が拠出する外になすすべもなく（それがいわゆる在外公館等借入金である）帰国後直ちに横浜正金銀行から返済する旨の借用証を貰ったのだが帰国して一、二年も経過してから五万円を最高限度として返された（私は二十万円貸していた）があとは打ち切られた。

召集、敗戦、部隊解散

昭和二十年八月九日はソ連軍は突然空爆して来た、日ソ不可侵条約を締結している国際信義からしてもソ連が攻撃して来るなどとは到底考えられないことであった。

当時在満日本人男子は殆ど召集され、私もソ連の空襲の時は、奉天郊外の砂漠地帯で幕舎野営中であつた。

毎日の訓練は、急造地雷を抱いて、重戦車に飛び込む、陸の特攻隊であつた、八月十四日午後非常呼集で、明十五日は重大放送がある謹んで聴けとの隊長の通達あり、いよ／＼決戦か！地雷を抱いて散り果てるか！

死の恐怖や、家族の安否や、生身の人間としての感情など一切考え及ばず無我の心境とはこのことか、日本男子として国に報いる、只それのみであった。

八月十五日非常呼集のラッパは鳴り渡った、幕舎前の広場前に整列、出て来た隊長の足取りは、常の威风堂々たる英姿とは打って変わった、屠所に引かれる羊の風情である。

日本は敗戦した、只今陛下のお言葉があった、居並ぶ兵も一斉に地に伏して号泣。

幕舎に帰り別命を待つ、お互いに見合わず顔々々クシヤ／＼の顔、これが日本男子の顔を流れる血涙か！武器弾薬、私物、食糧を残し外のもの一切焼却との命令、作業終了まで二日間を要した。

上部の命令も届かなくなつて、これからの行動は中隊単位となり、先ずは奉天を目指すことになった、この年の八月は悔し雨とでもいうか毎日降り続いた、しかも高温で行軍の苦勞は言語に絶するものである。

二昼夜歩いて辿り着いたところは遙か向こうに満鉄の線路が見える丘、ここが何とどこか見當もつ

かない。

この線路は満鉄が世界に誇る、特急アジアが轟音を発しながら轟進の雄姿を見ることもできたが、今は不定期に軍用列車がたまたま通るのみ、話し合いの末現地召集兵は解散、個々に行動することに決まった。

新京召集者は十人鉄道を利用するより方法がない、情報では鉄道もソ連に掌握されていて見つければ捕虜となる、又満人が暴民化して危険、地雷を抱いて飛び込む決意をした当時は里心も、欲得も考える暇はなかったが、いよ／＼目的が帰宅と決まった今となれば、何が何でも、心は新京へとはやる。

丘の上から鉄道線路まで一晩がかりで暗闇を利用してやっと辿り着き、列車に飛び乗る機会を待つこと一昼夜、ついにその時が迫つて来た。

天佑か薄暗くなりかけた頃貨物列車がそろ／＼とこの名も知れない駅に静かに止つた、注意して見渡したのがソ連兵の姿はない。

貨車の扉を押し開くなり脱兎の如く飛び乗り顔を見合わせ、安堵の胸を撫でおろした。

さて奉天へ着いた時が心配になって来た、奉天は屈指の特殊駅でソ連の警戒も厳しいだろうし、運を天に任す覚悟をもつ外はない、もうそろそろ明け方ではなからうか、そっと扉を少し開けると薄明りが入って来た。

この辺が奉天の近くの駅らしい、もし奉天で発見されたらと、思いは千々に乱れ飛ぶが考えている、いとまはない。

列車は奉天駅に入って来た模様で、細めに開けた扉越しに目に入ったものは、枕木を山ほど積み重ね、まるで火祭りを思わせる炎が天を焦すありさま、火影に写し出されたソ連兵の顔が赤鬼、青鬼に見える。

扉を閉めて固唾を呑んで息を潜め、早く発車を念ずるのみ、あ、天佑神の加護か、列車が動き出した、虎口を脱して新京へと向かう。

次の難関は新京駅の下車だが、新京駅まで行つては、張り巡らした網の中に入るようなもの、どこで飛び降りるかを相談した。

さすが新京在住者ばかりで地理に明るい。本駅の前

に南新京駅がある、その間に急勾配の箇所がありスピードがダウンするところで飛び降りることに決し、その附近にさしかかった時、次々と飛び降り全員が成功した。

この土手を上ると興安大路、児玉公園と続き、お城の屋根風に造つてある関東軍司令部がある、公園の樹木の間を隠れながら、駅前通りに出た、満州が誇る新京の大同大街、幅員百メートルもあるうか、中央が電車道、その両側が並木道、それに併行して軽車道、その両側が人道、新京は広野に自由に設計された都市であるから、このような途方もない企画ができたのである。

ここまで辿り着けばもう大丈夫、大成功であった、みんなが無事を祝い、再起を誓つて解散した。

私の家はみんなと別れた児玉公園より三百メートルくらいの梅ヶ枝町で、家の前に立ち驚いた。玄関に「大韓民国居留民団保安隊司令部宿舎」の看板が掛つているではないか、家の右手木材置場二百坪、そこに彼らの炊事場を造り、私の木材を燃料にしている。

その隣りが、紙業統制独身寮、そこは二百人くらいの人員を収容することができる。

その一室、広間が司令部となっている。

この理不尽な仕打ちに、私は血相をかえて殴り込みの心境で、司令室に怒鳴り込んだ。

「私は只今軍隊から帰還した、誰の許可で家屋を占拠し、木材置場を使用、木材を燃料とし勝手な振る舞い、言語道断である。」

幹部らしい者が、「日本は敗戦したのではないか、敗けた者が何を言うか。」私は「朝鮮と戦争をしたのではない。」

このやり取りを奥で聞いていた責任者らしいのが出てきた、あまり事を荒だてても得策ではないと思ひ、「私は家族を探して連れ帰る、直ちに空けて貰いたい。」いろいろ交渉の末、二階を貸すこととなり一階を直ちに空けることで話が決着した。

私ははらわたが煮えくり返るような思いであった、さて家族の行方である。各家は分厚い板を窓に打ち、警戒をして知人宅など探しに廻ったが開けてくれな

い。

「誰ですか」、「神田です」、声を聞いてやっと開けてくれる始末である。やっと岩本氏の家に避難していることが分かった。みんな無事で再会できて喜び合ったものである。

家族との再会、日本の土を踏むまで

梅ヶ枝町の私の家に戻るには、先ず荷馬車の手配が必要で、終戦前、木材商経営時代に出入りしていた馬車頭（満州では百台以上の荷馬車を持って運搬業をしている頭）に電話したところ、ものの三十分も経たぬうちに、顔見知りの馬車頭が荷馬車五台を連れて、駆け込んで来た。

「ジャングイホイライ」（ご主人帰って来ましたか）の挨拶、大粒の涙を流しながら、私の手をとって、「オイオイ」と馬車頭の大の男が只、泣きじゃくるのみ、口の中で叫びとも、慰めとも思えない中国語で何やら、言っではいるが、その内容は解らない、中国語には堪能でないので詳細は理解できないが、「お元気でよく帰って来られた」「待っていました」「おめでとう」さ

まざまな思いが涙と共に溢れている。

私が召集中に家族が避難していたその家に毎日のように訪れて、子供達や家族の安否、又、私の帰りを気づかってくれたこの人達は元の従業員、中国の仲間だ。日本人同志は自分のことで精一ぱいで、心に思っても、この中国の人々のようには出来なかつたのである。

国は違つても人情、道徳には隔たりはない、「積善の家に余慶あり」、私は今まで中国の人々に接するモットーとして、人間同志、変るものではない、家族の触れ合い、「喜怒哀楽」を共にし、在滿十二年の間、この主義を貫いた。そして、敗戦後の、何一つ頼るものがない、無防備の藁をもつかみたい、我々日本人に、この人達の与えてくれた「温情」、私は今でも思い浮かべながら、「有難う」、「有難う」、只、頭（こうべ）を下げるのみ。

家族の避難先の岩本氏の店も広い店であつたが、私達の荷物で殆ど一ぱいであつた。どの荷物が何か、判別の難しい状態であつたが、荷造りして運び込んだ當時の家の内なる臆気な記憶をたよりに、荷馬車五台に満載

して、我が家へ引揚げたのである。この時の家族は私と妻、長男（小学一年）、次男（幼稚園）、家内の妹（店のタイピスト）、以上であつた。

敗戦前、六、七月より新京在住者は、「通化」へ避難するよう、軍部から度々の通達があつて、移動した人も随分多かつたようだ。私の家は、女、子供と、出産まぢかな妻では、遠方へ移転などは到底出来る状況でなく、私の召集のあと、岩本氏の勧めもあり、同家に移つたことが、あとになって、大成功であつたのである。

「通化」はソ満国境に近い所で、なんで、あんな場所、いざという時、軍も一般人も収容出来る地下施設や、完備した設備を完成したのか。それは、日本とソ連には「不可侵条約締結中」で、いかなる場合でも、お互い攻撃し、又、受けることもないとの判断と、「日本に帰還の場合も北鮮から船で本国へ」、結果ご承知の如く、両方ともことごとく裏をかかれたのである。

ソ連軍は満州と北朝鮮へ怒濤の侵攻、今問題の満州孤児、又、肉親との生き別れの人々、これらの多くは

皆これであった。多くの犠牲者が出たのである。又、大丈夫と思つた北朝鮮は三十八度線でストップとなり、逃げ込んだ日本人は最大の生地獄となつた。私の家族は通化などへ行かずに、誠に幸運であつた。

なつかしの我が家で、家具、調度品、何不自由のない生活に戻るこゝとなつた。又、恵まれたことに、戦後、銀行からの引き出しは一人三千円に限定されたのであるが、満州興業銀行に知人がいたので、家内が裏口から銀行へ行き、二十万円引き出していたのである。昭和二十年の二十万円は、今の経済では莫大な金額である。

引揚げるまでの生活の労苦

我が家は炭鉱会社木材部の嘱託の関係で、鉄筋、セメント、一般では手に入りにくい物も豊富に使用出来たので、個人店舗、住宅としては、人目を引く建築であつた。

中国では保安隊（警察）官庁、民間人、それぞれがめぼしい家屋の明け渡しを要求して、日本人の家屋は日を追うごとに彼等の手に移っていくのである。私の

家は、個人や特殊機関などから明け渡しを迫られたことはなかつたが、めぼしい家として、たま／＼嫌がらせもあるのでは、何か良い方法はないかと、思案の矢先、ある日、中央軍空軍将校（中尉）が来訪して、空軍宿舎に貸してもらいたいとのこと。（終戦当時は大韓民国居留民司令部が占拠していたが朝鮮に引揚げたため空いていた）

中国空軍は日本空軍とは任務内容が些少異なり、空軍の任務と別に、特務機関の任務もある。「全部をお貸しは出来ないが、二階が二戸続きになっているので、これをお貸しすることはいかがでしょう」「結構です、二階を全部、貸して下さい」これで話し合ひは成立した。早速次の日に引越して来た。これが不思議な縁と申しましようか、この人「溥中陽」と深い関わりとなつたのである。

話をさきの二十万円に戻して、今日のように一万円札があるわけではなく、満州国興業銀行の百円の大きな札、二十万円はかなりの量で、隠すのに一苦労であつた。万が一、暴徒にでも入られた場合のことを考えあ

わせ、一般的に日本人の金の隠し場所は、「仏壇の中」、「額の裏」、「神棚」、「畳の下」、日本人の家に押し入る連中は、このことを充分に心得ている。侵入して先ず最初に銃の先で神棚をつつき落とし、仏壇をひっくり返し、額を落とし、最後に畳をひっくり返す。この順序で荒しまわるので、この手口に乗らない方策を苦心しなければならぬ。そこで、空缶に詰めその上に、「お茶」、「海苔」、「豆類」、日常食卓に使用する物を詰め、台所の棚の上に放り上げて置くことにした。長い人生の間には金のやり場に困ることがあるものだ。

そこで、外部からの人目を欺くためにも、何かして収入を得て生活しているように、見せかけを作らなければならぬ。耳よりの話を聞いた。

新京市の鉄道北に松竹梅の酒造工場があった。そこをソ連兵が監視しており、四斗樽一樽（絞りたての原酒が一ぱい詰まっているもの）を五円で売ってくれるとのこと。早速、出入の馬車頭に連絡し、金を持たせてやったところ、話し通り、荷馬車一ぱい満載して帰って来た。

当時、新京市中には、その日の暮らしにも困っていた人達が多数いた。特に高官の家族で、ご主人はソ連に連行され、かろうじて官舎に住める人達は幸せな方で、知り合いの家に世話になっている人も大勢いて、持ち物を次々と売って筍生活、切ばつまって「巻煙草」を造ったり、（煙草の葉は満人の農家にあつた。紙は英語辞典の紙が一番良いとのこと、この辞典が随分買われたものである）又は餅を造って売ったり、細々とその日その日を過ごしている気の毒な奥さん達の仕事に、この酒の販売を思いつき、ある官舎の一軒でこの原酒を水で割って、一樽を三樽位にまで延ばすことが出来た。当時は酒は珍らしく、メチールまであさる時代だったので、それはそれは飛ぶ売れ行きで、鉄北の松竹梅の酒蔵は殆ど空にした。この金が幾十、幾百の引揚げの助けになることになった。

又、北方から新京へ、新京へと辿り着いた人達から内地送還が始まった。この人達の食事は、もっぱら、「おにぎり」で、その中に入れる梅干が必要だった。これも、日本軍の倉庫を管理しているソ連兵のいるこ

とを知り、前の酒と同様、その金で樽入り梅干を確保することが出来、「おにぎり」に充分入れてあげることが出来た。このカムフラージュ商売は利益などは勿論計算に入れてないので、最終的には、原価、運賃なども大いに割り込む始末だった。

先に述べた、二階に居住している中央軍空軍将校(溥中尉)があるとき、一週間くらいも帰って来ない。案じていたところ、ある朝、未明にかすかに裏の出入口を叩く音がしたので、抜き足、さし足で近づき、小声で「誰だ」、外から「溥です」、これも小声で応答して来た。そろそろと戸を開けて驚いた。その顔は泥だらけ、着ている満服はぼろぼろ、手足から血を流している凄惨なありさま、早速家に入れ、先ず風呂にお湯を入れ、ボロ切れのような服を脱がせて頭から足の先まで石鹸で洗い流し、やっと、さっぱり人間らしくなった。溥さんの顔にはほほ笑みが戻った。傷も、有刺鉄線や物の陰々をさまよった時の掠り傷くらいで深い傷ではないので、一安心できたのである。

私の服を着せ、共に食事をして一日休養、明け方早

朝、どのような様子かと二階の溥さんの部屋をのぞいたが、すでに出勤したあと。その日の夕方、別人ではないかと思われる変身振りで、中央軍空軍中尉の制服(制帽、長剣こそ提げてはいないが、ケースも真新しい、新式自動ピストルを携帯して、直立不動で拳手の敬礼のその姿は、まさに、空軍中尉の貫禄充分、私も思わず、拳手の答礼をしてしまった。

そこで、前日の傷だらけで辿り着いたいきさつを聞いた。奉天が中央軍の本部で、指令を受けるため、奉天潜入、その帰途、「八路軍」(パード)とも云う共産ゲリラ部隊)に追跡されあの始末だったとのこと。本部の命令は、新京にある旧日本憲兵隊司令部を中央軍空軍司令部にすることで、溥中尉の受けた特命はこれであった。それから二、三日して、旧憲兵隊司令部の看板に代って、空軍の立派な看板に変わっていたのを見た。

この空軍には勿論、隊長はおられるが、先にもちよつと述べた通り、空軍は、その任務の外に特務機関的な役割もあり、当時の満州ではその方が重要であったかもしれない。日本人の使役などの采配は、ここから

出ているのであって、その主官が溥中尉なのである。

「シンテンセンション（神田先生）、（中国では目上と
思う人には先生『センション』の敬語をつかうのが習
わし）勿論使役などに出る必要ありません、何か必要
なことがあれば言つて下さい」とすっかり、うちとけ
た間柄となった。

新京市中も日本人の姿をおいおいと見かけるようになつた。ソ連兵も随分と多くなつて来た。「もの盗り」、「強盗」、「婦女暴行」、ソ連軍には軍制はないのかと、疑われる始末の毎日が繰り返されている。町の中で出合うと、「ダワイダワイ」と日本人の傍に寄つて来て、身につけているものは手当たり次第掠奪、ある兵の如きは腕時計を何個もズラツとはめている。（彼等は時計がネジで動くことを知らないのである）一つの時計が動かなくなれば、次に「シヨートル」して腕にする。だから何個もしている。シャープペンなど右に左に捻り廻して遂に壊してしまう。日本人としては不思議に思うが、結局はソ連では、時計も万年筆もペンシルも一般人は持つていないのである。

前に述べた使役のことで思い起こすことは、私の家の裏側に二戸建の立派な貸住宅が有り、一戸に元日本軍の通訳をしてした中国人が住んでいた。ある日、窓越しに見ると、一室で、汚い満服を着た髭面の風采のあがらない人が、石臼で粉を碾ひいている。どうも日本人らしい。二、三日後、顔を合わせる機会があり、日本人と判明した。日本で軍に召集され、現地除隊で行き場がないので、ここにいるとのこと。満人の家で粉碾ひきをさせておくのも可哀相に思い、私の家に引き取ることにした。本人もぶらぶらしているより使役に出れば、なにがしか得られ、友人も出来るからと、使役に出始めた。

ある日、「こんなに煙草を貰いましたからご主人に差し上げます」とのこと、私は「煙草は不用だからあなたを持つていなさい。」その煙草は全部米国のもので、「こんなものどうしたんだ」と尋ねたところ、「使役中に外人の通訳をしたらこれをくれました。」この風采のあがらない小男が通訳などとは不つり合いに思われて、尋ねてみると、「私は神戸の外語学校を卒業

しました」とのこと、人は見かけによらないものと、つくづく感じた次第。この人は「井世田」という、内地へ一緒に連れて帰った一人である。帰国後、折り折りの使りはよこしていたが、昭和三十四、五年に死亡した知らせを受けた記憶がある。

いよいよ引揚げが始まった。内地帰還は奥地より新京へ集まった人々から先ず始めて、次に新京在住の順となるのであるが、その送還費用が一人三千円を払い込まなければならぬ。が、それすら持たない人々が多かった。私のところへも、つてを求めて頼って申込みがあった。紹介者の話では、「荷物を持たせて下さい、内地へ着いたらお宅へ送らせます」との条件であった。申込者は随分な数になった。又、内地で軍隊に召集され満州除隊の人達は全くの無一文、この人達も五、六人は連れて帰った。この人達は何も持物はないので、荷物を持って貰うには最適任者であった。私は送還部隊の中隊長をしていた関係で中隊の方々のお世話で一ぱい、自分の荷物は全く持てないありさまで随分この方々の世話になったものである。内地帰還後、礼状

と共に預けた荷物を送り届けたのは四国の木材商とかの若主人という人だけだった。

引揚者は内地に帰っても、先ずその日の生活を得ることが先決であった。自分の手元にある物は自分の物、他人の物とかを見極める余裕すらなく、金に代る物は先ず金にして、その日の食を求めなければならぬのである。私の預けた荷物が返らないことの失望とかその人に対する不信とか全く感じなかったのである。むしろそれが一時的にその人のためになったことを喜びとしていた次第である。

昭和二十年の年も明け、次の年の春を迎える頃から私の住んでいた梅ヶ枝町一帯もボツボツ順番が廻ってきた。汽車は客車ではなく有、無蓋車の貨車である。一両に数百人くらい乗らなければならぬので、何か設備をしなければならぬ。考えた末に貨車の上に槽を組んで二階建にして上下に乗ることにした。その槽の組立には、私の家の隣が二百坪の木材置場でも手ごろな用材はあるし、思った以上に立派な二階建槽が出来上がった。組立式にして番号をふり、出発当日、

直ちに組み立て出来る仕組みとして出発の日を待つことにした。

私の引揚げの話を聞いたのか、在満中に関係した中国人の達が日々訪れてくれ、ある友人は「三年すれば必ず満州へ、ジャングイ（あなた）達は帰って来るようになりませうから、必ず帰って来て下さい。」仕事をした人達は「又、一緒に仕事を、使われていた人達は、「又必ず使って下さい、」

光陰矢の如し、ついに別れの日が訪れて来た。初秋を思わせる、九月初め、どんより薄曇り、思いなしか、風も肌にも冷たく感ずる日だった。組立槽は馬車頭の配慮で南新京駅へ運び込まれ、乗車する人は勿論、馬車夫や見送りの中国人の手により、手ぎわよく立派に組み立てられた。全員順々と乗り込み、発車の時間は刻一刻と迫って来る。発車合図の汽笛がもの悲しく鳴った。貨車は静かに静かに駅を離れる。手を振る中国の人達、別れの言葉も一つの「うめき声」となる。滂沱と落ちる涙、別れ行く車上の人、又、頭（こうべ）を垂れ止めどなく流れる涙、万感を胸に貨車は次第に遠

ざかって行った。

ここで、今朝出発前に僅かの間ではあったが、互いに良き知遇を得た「溥中尉」との別れに際して、私が秘蔵していた日本刀三十六振りを託し、内一振り、「水田国重系」大刀を空軍隊長へ寄贈することを伝達、三十六振りの内には古刀名刀凶鑑に掲載されている、「了戒作」冠り落としの珍しい一振り、肥前忠吉系「武蔵大拯忠広作」欄間彫の脇差し「彫りは埋忠明寿」、どれにしても、今日、日本にあれば国宝級のものと思う。日本の宝であるこれらの日本刀を、名もない者の手に渡すことを恐れて、溥中尉に託したのである。互いの無事を念じ合って男の涙の別れであった。

出発の基点は、南新京駅で次は奉天に一週間くらい、次は錦州か錦西で引揚船の入港を待つ。港はコロ島港といっても島ではなく、陸続きの大きな船が横付けになる岸壁のある港である。

朝から曇りがちだった天候も、奉天近くになってとうとう氷雨となった。その内、伝令で本日は奉天鉄北の旧ガラス工場で一泊とのこと、何のため、こんなわ

ずらわしいことが必要なのか、理解に苦しむところではあるが、中国側の命令であり、致し方がない。

奉天、錦州、錦西、コロ島、いずれも大同小異このような経過を辿り、コロ島の岸壁に着くまでに南新京を出発してから約一か月近くも要した。コロ島で「日の丸」を見た時、「よくぞ生きてここまで、我が祖国、日本よ、日の丸よ」改めて大地を強く踏みしめてみた。家族の顔を確認するように見渡した。みんな安堵の喜びを顔に、母の背ですやすや眠っている。一か月程前に生れた長女、みんな達者で、よくぞここまで帰って来た。

栈橋を通り乗船、第一歩を踏み入れた瞬間もう安心、これほど安心感を覚えたことは前にも後にもないだろう。納まるどころへ納まるとお腹がすくものである。しかし、船中の食事はこれ以上の粗食はないしろもの、高粱のお粥、副食物は芋蔓の浮いた、底の見えるようなみそ汁、それでもそれぞれに工夫して途中の食事について研究して、個々にいろいろのものを持っていた。我が家も餅米を炒って粉にしたものを幾袋も持って来

ていた、食べる時はこの粉を茶碗に入れお湯を注ぐと柔らかなお餅のようになる。これで随分と助かった。

近所の開業医の先生とご一緒で、この先生が葡萄糖を持っておられたので、これを湯呑に溶かしたものを時々相伴させて頂き大助かりであった。

佐世保へ入港した後も、検疫とか何とかと数日を船中で過ごした。それでも「内地だ」「日本だ」港を囲む日本の山々、遙か向こうは佐世保市だ。甲板に出て「今帰ったぞ、日本よ。」「よく無事で。」大声で叫びたい思いだった。

いよいよ上陸だ。船のタラップを降り港の栈橋に足が着いた。引揚げの中隊の皆さんと別れの言葉を交わすため、中隊長の私が先に下船。「大変お世話になりました、お達者で。」目がしらを押しさえながら満員の引揚列車へと別れて行った。

執筆者の横顔

明治四十二年頃の時代に、高専で勉学できた神田氏は、まことに恵まれた人である。

高専を出れば大方の人は官庁か銀行のホワイトカラ

一の姿に憧れたのに、彼は未だ治安おさまらぬ危険きわまる満州に夢を描いた、しかも養子である。彼の義父母は許すわけがないのに、彼一流の信念居士の雄弁で説得につとめ、ようやくにして納得せしめた、若き日の彼の面目躍如たるものがある。

義父が、これ資金と出せば、一銭も要らぬと頑張る、要らぬと言われれば尚更に養父母は差し出したくなる。

高専まで学んだ彼は、もう既に、こう言えば、こう成る、こう言えば成らぬとの心理学を会得していた猛者であった。

飽くまで断わることは親子の情理にそむくと思ひ、旅費三百六十円也を頂戴し、昭和十一年勇躍大陸満州に渡った。

案の定、戦乱の大陸から砲煙消えて、五族協和の新しい満州国誕生とあつて、日本、中国、朝鮮から満州入りの軍官だけでなく、民間の大中小の企業人が雲霞のごとく集まって商工、鉱業の設立建設に大童の盛況が展望された。

この建設に役立つべく、かねて企画していた木材商を開業し、既に進出している、満州清水、満州大倉、満州竹中等の大企業に応えるべく獅子奮迅の努力を傾けたことは言うまでもない、彼、神田氏が一度動けば、己れの企業の繁栄につながる。たちまちにして彼の木材商は、それに関連する器具、金物、運輸等の数社を経営して、新京では屈指の木材商に成長した。神田氏の私有財産は、今の価格に換算すれば百五十億ないし二百億円の資産である。

ところが二十年に召集で奉天の野営兵舎に入り、直ちにソ連攻撃を始める命令であり、決戦である、と、しかるに、隊長より陛下のお言葉をきく、兵はみな地に伏して号泣。

彼は新京の自宅に帰り、紆余曲折あつたが日本人は万難を克服して引き揚げる信念で神田氏は、今まで何百人かの現地満州人にあるものを与えて別れた。

無一文の引揚者に、渡航費三千元を供与したりして、彼は在満十二年の体験を経て、三千元を持参して佐世保に上陸した、満州社会開発に寄与した企業人の範で

ある。

(引揚者団体北海道連合会

副会長 佐藤 晴夫)

満州聚和義勇開拓団の惨状

北海道 米 司 好 美

終戦間近の開拓団の状況

私は四小隊でしたが四、五小隊は身長順に並んで番号をかけ、右向け右で二列になって前列が四小隊に分けられた記憶があります。

従つて徴兵検査も満二十歳に達しない者わずかを残して、四、五小隊は一緒に検査を受けたのですが高橋君と私は飛行兵の第一補充兵となり、入隊の通知はきませんでした。

本部の採種圃が青年班として私と加国君、それに本部の浅津君が応援に加わつて三人でやることになっていた。入隊通知が来ないのなら一年でも早く第二部落

に行きたいと、団長に相談したら「決定したことは変更しないが、行くことは止めない」と言われて第二部落に入りました。

青年班は解散して、加国君と浅津君は兵役を早く済ませる意味で志願兵となり入隊したところ、除隊してきた佐藤周三郎さんに召集札状がきたのかわきりに、十九年春に本部は十四戸の留守家族が出来てしまった。

団本部では今後の対策について協議が行われたが、精神主義だけではどうにもならぬような気がして、考えさせて欲しいといつて、具体的なことは言わないで帰った。

あくる日私は、留守家族は自給の野菜だけ作つて、他の耕作は無理であるから中止してはどうか、私は勤労奉仕のかわりに各戸に馬の野草を一トンずつと、主食に混ぜる金時豆を百キロ進呈しますと申し入れた。

しかしその秋の全量を提供しても足りない状態で、草は馬車一台ずつ、豆は南京袋に軽く一ばいでかんべんしてもらつた。草も共同で取りに来た人は多く積ん